伊勢物語新釋

三

特別
イ4
3163
203(3)

貴
14
3163
203(3)

皇學文庫

伊勢物語新釈三之巻

廿七段

むかしいろごのみなりける女出ていにければいふかひなくて男

女の色このむこゝろより男をいとひておいていぬるをとゞろかおそれ男まてえさそひなくてかくあふごかたみてなほあふさすゐるをいふかひなくてとそいへるなり

○いふかひなくて男　塗嘉二本によりてくはへり

などてかくあふごかたみも成ぬらん水もらさじとむすびしものを

一その意ハなにゆゑにかくあひがたくハなりぬらんかはらじと契りしその詞をもちぎりしを女のわすれハせじをあやしやとひとりごつ

國學文庫

なりさて たらひのかげをかくてゝひかけてかゝみともなればくもる水ハ
ぬきてあらなくあるをもて詞をしるしてたらひなり接搩葉了
らしずよ君ずつゞのえしもとのはかくみよくあるあぶずあるまじ
さしええるをとらぬるを行させ考るにちがひしまぬりそるを
かくらたにくあるあれとまりぬよたらひてもてふるに云種まで行わ
らんかるみハ神代紀了無目籠（マナシカタマ）又一書にハ無目堅間（マナシカタマ）ともあ
りて堅間ハ是今之竹籠也といつりかたをとるみともいふハま
とみてと通音なるバなり

廿八段

○あひかたみともかゝぬらん　ちがひしその紙（元塗本にもかくあり）
むかし东宮の女御乃御方乃花の賀にめしあづけられたりけり

ゐたを侍づかさなりける人
東宮の女侍とて东宮の侍母女侍をまうすなり古き乃說ハひが
ことなるをやく師ちいされき侍るとハ女侍がたの御人の賀
ぬよしあり花のとろあるをむの賀といつりけて东宮の女侍を
侍づかさなりける人あどいつるを二條后業平ゆるのあるをほのめかう
していつるなり

○めしあげられたりける　近侍づかさなりける人　古本にもてかく
花にあかぬなげきハいつもせしかども今日のこよひに似る時ハなし
なげきハ太息をつくるるゆゑ歎息なり一そのよハむをえあ
如歎息ハいつもせしかども今日のこよひハ御賀のわざあそびくれも

しろうともえへぞ花にあかぬなげきは格別ぞといへるなりさてさき

ひそかに女御をおもひまゐらすれどおよばぬ思ひの歎息をほの

めかしたることもあるべし

廿九段

むかし男はつかなりける女のもとに

男ハあふこともおろそかにしくいつぞやほしくおもひて恋わたれど女の

いよゝれにきつてのこゝあふゆゑにきつくなりける女といへりかく

えざればなほつらき心のながく見ゆらんといへるにかなひぬべし

かとたへば

あふ事ハ玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながく見ゆらん

いふ事ハ玉の緒のやうにみじかくしていふをバ家につけたるが

こゝろはながく見ゆるこゝろならんと云意んあふ事はみじかければぞ

それに恋してつらき心もうじかくあるべきことおほかるる思ひ

いづれちるにその婦へまゐらせしわざく

三十段

むかし男宮のうちにてあるごたちのつぼねのまへをわたりけるに

みやのうちハ禁中ごたちとハ宮づかへしたまへる女房をいふ

つぼねとハとほるるん

○わたるに　塗云二本にあらず

何のあたにか思ひけんよしや草葉のならんさがみんといひけれ

ば男

そばのまへを男はるとえてうらみける女の何はあらんに

うちひらんしらくいへるも此いへる詞のこゝろハ家をわかれて行とも
おもきぬ男ハふくれどもしやちるらそずして草葉のそでハ家
ゆかやうになからん男のあるさまをえんといへるなり草ぞ此
しげらせたれバほられくなりしを人のそやくおもしろかるをとゝる
なりたる墓のさまに草の生るちゝてとられぐるまで墓といひ
るかなくていらで墓上の草やたぶらん草葉のなからんさらる詞の
さけられおもろつる事ゝそてん此草の生るよしあらバ草のせん
とかぐべし葉とハいふすじにくたぐそ行つさまとえ之く經断に
日本紀に祥の字をさかとよめるをひきてよまれるすしもあしき
事なるも志りし給るんくといへるハ中むかしの詞づかひを志らぬ從之

すべて古事記日本紀などのことばによみなづらへてハ此れあやまりなり
なをおほしきの語ハ物がたりの詞づかひの例によりてよむべけれ
○行けるかな 塗去二本に 行をけふなりとあるハわろし
伊勢集にもわづらふことありける時かなしき風のそしむとしれる
花みしもふくとけり 草葉の塗去細三本にもふかくあり
よみける本ハわろし いひかれど塗本にしたがふ
忘るもれさく人をうけんぞわすれ草おのづからぞおふといふ心は
いましへにうけんよそ人のいへをいれてあしくもよくも忘れ
るすなるを中むかしふを行しくなりにたのといへり此哥の
こゝろハつらきれき人をいのりてあしくなさんとすればくりそおのづ

身のうへにかへりくる事ありといへるにて法花經の普門品に呪咀諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還著於本人とある事ぞ

へなりわすれ草のおひずらん人にはかゝる人にわすらるゝ事ありおのがうへにはおのが身のうへのこと古意の説はよろし

といふをねたむ女もありけり

かくいふよしや草葉のことばをきかれて男のねたく思ひてよみけるそれこの歌よみけるをきゝて女もねたく思ひけるをのせてあるをば男よりかけてみるべし

○ねたむ女もありけり　塗本にはなし　ねたむ女をかりそめにつれてよみける説どもはあやしきことなり

卅一段

むかし男ものいひける女に年ころありて

ものいふ事をかよひけるよし也

○男からふりし　いづれの本にもなければおちたるなるべしさるにてはいに

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな

いにしへのしづはたをくりかへし〳〵といふ如く今にあれ度く昔あひける女に中絶て年へてのちおもひしくおもひて又あひたくおもひしよしをいひやりたる歌なり

といへりけれど何ともおもはずやありけん

おもひし男あれば今はかれに何ほしきよしもたのむべきにあらずば女の何ともおもはずやありけんと記者のいへるなり

卅二段

むかし男津の国うばらの郡に住ける女にかよひける此たびゆきて
おぞ又ハこじと思へるけしきを見て女のうらみけれバ男
かよひなれの下にかくしてふをいをもしてみすべし
○すゝける女に　塗本にようてくるハ　かよひなれ下なる女ならじ
塗本にあれぞなき　それを見て女のうらみけれバ　塗本にあるが又
芦べよりみちくるしほのいやましに君に心をおもひますかな
たゞしハ海づらにすむものゝわざハ禄よしほのみちくるを芦べよりとハ云
なり此よりハいとゞ云にあらじ　古今集の歌詞書に山川よりもの
あられなきをかるも山川ありと云となる事おぼをもやくさん併ス
いひさけて一そのちろハ芦べよりみちくるしほの見ずなうちにいや
ましにまさるく君に心をおもひまさるれといへるなる歎息し
たるぞほそしかくまでおもひのつもるものかハといひてんぞ
あやすお女のうらむるハいかゞあらんえぞといさむる心とき
めぐるんさて芦べよりを拾穂古意などに芦べよりみちくるしほ
ハいええびしてまさりゆくにたとへて同ふそええざるわざんにハ
いやましに君をおもひまさるといふ事くとりわけるハしほのいやましにと
云詞にかれハぬ説くそがうへによりをいづくよりいづくへと云たぐひ
のよりとえたわけるもたやすからくしかハ沖よりこそみちくるといふべう
芦べよりみちくるちのあらんものよりハふとええよえざれバげえに
ちもハ沖のしほをまんをええまでに芦のしげるほとりのうらにつくれち

くるしさはいやましにおぼゆるよしにていへるなり

かへし

こもり江に思ふこころをいかでかは舟さすさをのさしてしるべき

君がこゝろのうちにこもれるおもひはいかでか推量してしるべきといふを江とふ縁に舟さすさをのさしてとそいへるなりさしては推てしりてといふ言なりこもり江は万葉集の哥にこもりつの隠沼をかしこもり江はのどよあるやうに山陰にこもりたる江なるべし古言にこもり沼とおなじ言にて芦にかくれたるならんとおもはるゝ沼はちひさければなどもあれば、こもり沼は草生しげりてかくれたる沼なるべく江はひろくてある芦のしげりかくれたればさていふべしやそ

ゐなか人のことにてはよしやあしや

此哥どもゐなか人のことばとしてはよしと作者のほめたるよしあるをいひたるにてさらにかくよめる哥なればしかとはいひがたくてやとうらびあしやよしやと判をそへたるなりむしろ此言をそへしあてとげる人なし

卅三段

むかし男つれなかりける人のもとに

いへばえにいはねばむねにさわがれて心ひとつになげくころ哉

えには不得に万葉に不知をあてたるといへるにおなじく不をそへてぬの通言にいはんとすればいひえぬのことなり一説に言は人のつきなきをとふかくうらむるふしをいひもてゆかねばいはんとすれどもいひえぬ

らみちうらもそのよしをいへではうけてむねのきこゆまる事もあ
らんよいひえねばむねのさわぐなりかく人よいをびんびやうよなげく
けられと歎息したるなり
〇むねの塗本にきこゆふむねちとある本ハよろし
おもひしていへるなるべし
いへどえまとふやうなる意也ふかみてかくるハ人ともつのたぞよハあろ
じとおもひしていへるなるべしと男の心のうちをおしはかりて記
者のいへるなり
〇おもひして　塗本にきこゆふ　他本にハおもはくてほとにて
それぞびくをれくようしあやまれるなるべしそれのかくちよ

卅四段　くゆなわ
むかし男心にもあらでたえたる人のもとに
心のかはるにハあらでゆゑありてたえたるなり
〇男よみける　塗本二本によりてくハへつ
玉の緒をほそをによりてむすべきハ絶ての後もあはんとぞおもふ
あわをハほそをいふむすびのえんのちなりかいびむすびあはぢむすびな
どよハ此あわむすびをよこなけわるなるべし此おなじの句玉の緒をよ
つきてほそ緒にむすびたちぞうつをよえるべしけて一首の意ハ玉の緒
をよくよりてのへてあわをといふむすびに結びたるもしやうの中
なきにゆゑありて絶たれどもかくていつまでよはなうちてじ又とよれ

がくけもんとあるてハいへるかくさるハらくようとのへぬ玉の緒を絶ぬまではつらしすてなげくることあれどもかくのごとくのへてあわむすびに結びたる玉の緒をあはざらなるねでたえたるをつぎてつなぎのしをばふとくへていへる脆断て此方のこゝろをさらむとあれど拾穂抄の説なりしたハ信るるにあまぞそれまへりて古意におほくの糸をよりてむすべる緒ハ絶るまじくきこゆるも猶絶るすぢありてそれぞれに絶へうるといふもなほわろしさてハ絶るといふことのよハあらざるべく

卅五段

むかし男わすれぬるなめりととひごとしける女のもとに

男は久しくおとづれねばおとづれしたまはぬをわすれたまひし

さらなと女のいひおこせたるにこたへたるなり

谷せばみ峯まではへる玉かづらたえんと人をわがおもはなくに

此歌ハ谷がせばき故峯まではひのぼる玉かづらハ絶ずしてはて行るやうに行末ながくかはらんと思ふ人に中々たえんと人をわがおもはぬわすれぬるなめりととひごとしたまふそのみたるまゝにを心なくぞ思ひ給ふるとぞ思ふそのいひさしてのこるきハよしといふかたし詩經にもおもひしその下の句にはえだきてたへ千とせなる玉かづらのおもひをたえんのこゝろもハなくまことのこゝろをすゝしうるてはかりがたき此事をいづれもは信すにもいへり

○人を　塗本にしたがふ

卅六段

むかし男いろこのみなりける女にあへりけりうしろめたくやおも
ひけん

うしろめたしハうしろやすしと云言のうらにてうしろめたく
しげきハかやうにくやおもひかねたる心をよくいひてやりつと記者のいへる也
こゝろなり

われならでしたひもとくなあさがほの夕かげまたぬ花にはありとも

此の意ハあさがほのむげにはかなげなるをもていふにかへれるやうにおもふもあだなる
心ありとも我ならでよそ男に下紐とくなと女をいましむる也
あ信ハ結句を此よめる塗本なるあさがほの夕かげまたずちりや
すれども世ぞうし六帖によりて改めつきてなほむかしのまゝなる本の花の志
ぼひもやしぬらんとおもへる事によりて夕かげまたぬ又を下紐とく
なよなどいへるなるべし

返し

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまではとかじとぞおもふ

歌の意かくれたる事なし万葉集なるふたりして結びし紐をひと
りして我ハとき見じたゞにあふまでハといふをとりてつくれる

卅七段

むかし紀の有常がもとへいきてひさしうこざりけるにいひやる
まうした友なる有常がもとへまうでて久しうかへりねでありしに
ひさしくたまへるほどのいきてよそへありきしおはしまさざりしにや

○此ハ塗本にかくあるぞこれ古本なれ本ともにかなはざりければ

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらん

此歌ハ君をおもひしそめはじめて思ひならひぬ世の常の人をうらやまれ

事をや恋といふらんといへるなり

かへし

ならはねば世の人ごとに何をかも恋とはいふと問ひし我しも

これが歌二句ハかけ歌の世の中の人ハこといへるをうけたるなり

世の人ごとにといふを何をいふぞとまどはせるなる人ごとにとひ

し我しも君の恋の師となりぬるよといへる臆断古意などに

此歌二句を世間の人ごとにとひしとはとられたるハみだりなるべう

人がらによるべき

卅八段

むかし西院のみかどと申すみかどおはしましけり

臆断云淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後西院に

おはしましければ西院の帝と申す西院ハ四條の北大宮の東なり

又ハ淳和院とも云もとハ橘大后の家なりといへり

そのみかどのみこたかいこと申すいまそがりけり

臆断云崇子内親王母橘船子正四位上清野女承和十五年五

月十五日薨十九歳今年六月に嘉祥と改元あれば嘉

祥元年なりといへりいまそかりけるハおはしましけるに

おなじことなり

○御子ハ　古本によりてにの文字をそへくはへり

そのみこうせたまひておほんはふりの夜其宮の隣なりける

男御はふりみんとて女車にあひのりて出たりけるも

御葬みるとハ御葬送のさまをみるなり　女車にあひのれるハ志

のびてみるにおなじく

いとひさしうゐて出たてまつらず　うちなきてやみぬべかりけれ

あひだなり

古意ニ轜車を挽て将て出まゐらするをおそれを偲びつ歎息

して今ハえびてくるんとするほどなくよくみれしそでよれ

臆断の説そわろし

○ゐて出たてまつらず　うちなげきて　これ古本によらず

あるんのまつりもあめのさ條れつる條とのふ人達とものいふに

天が下とそて天下一のことのいへるなりそはじめよ侍ふ

まえんとそとほとどもてもおほかたなるべし

此車を女車とみてよりきてとかくなまめくあひだにかのい

たる蛍をとりて車にいれたりけるを

とかくなまめくとハとかくにつけてなまめけるさましてたはぶる

するなりさてとかくするあひだにおもひがけずして蛍を車にいれ

たるへ　此ハ其の文かくてハなかなかくそいへるさまにいでさき人

とらえていひごとくなまめきて蛍をとりてなげきてあるべくにも不

いたはりけるにすかしいでにきこゆる由さりなれどかくてそはり
ぬべし

○古本に女ひとりのれる車とみえてあるハわろく蛍をとりて車にえゝ
らにるてよし

車なりける人此ほたるのともす火にや見ゆらんともしけち
なんずるとてのれる男のよめる

車なりける人ハ女く見ゆらんと思ふも来ちらんとするもこれ
その女なり

○此蛍のともし火にや見ゆらんといひてと古本にはほたるを古きてさるほ
もいちびる師のよしといへれどさて八文つられくなれりける虫乃

しるのひかりをほのかなれとも見えてといへるぞおもしろかりけれかくてそ
そうかゝれをけちなんといへるもよくかなひぬめりかくいふも蛍火
といへるをや○思ひてぞありけんとハこゝに古本にはあらず
臆断の本にとるとてハさてをかしたやまれるなるべし
いでゝいかなるかうなるべしとめしつるをいとなく禅をさけ
此分沛子の清車を挽出ゆくぞうかうの沛門出なるべしとみゆるを
経に如㆓焔盡燈滅㆒とあるすがたく侍りけり此女車をとかく経さ
せ経へるをはなちてもさかりでうせ経へるとみる人のうれ
しみなくをさけ女車のうさハりによりてすればするハきりなほを
ずいひるにをしへてたるなくをへかすハ経ぬるかそのきこえとめしはた

ことハ送葬に松ともしたる火などはかなくこそあれバ思ひよりていへるよし

なるべし経断にいでいなばとハ蛍をたましひによせてあはれがりてい

まゞとえさへとけるそもいのちひとへ文古本にえしるし結びて

てなげくを年経ぬるかと泣にそへてかくといはれもわかるし

○ともしつき　古本にあらず

かのいたるはえし

○此句　古本にはなきぞよき

いとあはれなくぞきこゆるともし火のきゆるものとも我ハしらずな

くげなになく声をきけといへるをうけてまかいへるにはなくぞ

きこゆるさへともしつゐとのもまで法華経に我雖説涅槃是

則非二真滅一とけるごとく常住不滅なりと思へぞきゆるものとも我

はしらじなと云意也

○ともし火の　古本にあらず

となんかへしけるてのしたの色好このみのうたにてハなほぞ

ありけるか

天下第一の色このみなれバおかしかるべきにはる人のうた

ふしてハなほしくおかしからびぞありけるといへるにや

いふ給を順うへの文古本になけれバその後の人かきそへたれ

ともあやまりて本文にいれつゞきたるを拾穂抄の本など

一字さげて本文と差にかくさる本のはりしにそへさる

を臆断に本文としてとけるはいぶかしや
○とおんくへしたりける　まなにまなぶ
（卅九段）むかしわかきをのこけしうはあらぬ女をおもひけり
けしうはあらぬのけは異にてかきみえはあやしからぬをいへるを
てうつくしもわろくもなしといふことにつかへてすぐれてよきを
いふ何にはあらず帚木巻に中将しきのかしうはあらぬ同じやう
えなりてまたにんもけしうはいたくはなしといふ事などみえたる
もなしといふをおさへてかゝる臆断に似つかはしうもあらぬ
ことをとけるはあまたにたれど古言には常人にすぐれたるをいふ
とされたるもわろし此女のうへはやうれどいひはのほんおひ

やうんまうさもとくに此男の家にありつる女なるべし臆断には
やの娘なるにふいつまでもとてはは此女とうたがひもいやしかれどもあるかたを
わりびさるは中にも女なるもとわろくもはかなきを申しうはあらぬとくつるん
わろしうするおやありて思ひもぞつくとて此女をほかへおひや
らんとん

續日本紀に案二令條一良賤通婚明立二禁制一而天下士女及冠蓋子
弟等或貪二艷色一而姧レ婢或挾二淫奔一而通レ奴遂使二民族之淪没一為二
賤隷一公民之徒變作二奴婢一とみえたるはこれ民族の亂を正しく
せんためなる良賤通婚を禁制せられてみだりかしたるきこゆればかく
ぞはせるをいる賤とは人の家につかはるる奴婢をいへり（吏学指南といふ書に倡優官私奴婢謂二之賤一とあり）

さるを世のならひにまかせバ家におきしつゝ女にかはれ男のもとのつかへを禁しけしう
せさせじとはかるなるべし さかしらするとハかしこぶるにて
すまじき事をするを云 万葉集の歌にあなみにくさかしらをすと酒のまぬ人を
よくみれバ猿にかもにるとあるをくらべてさとしらるべし 酒のうへにて意はよ
きはまなはおもひたゝうこれかしこぶりてをふくみてらんずべく
はやくおもひつきしたる中をさけんとする親のしわざをにくみて
いへるにこそ 一の巻にいへるごとく物語ハかゝるところぞ情のふか
きをよしとさしあくねをはしらるゝそのれもバなりとひるぞてつく
とふりて思ひつきでとひつれてされさびなりくなんとはまさあやうく
おもへくおぞと云てみそてハこれさかりのきこえものぶるなれおわり

もぞすると云かなく老人あらんべし
さこそいへまだおひやらず人の子なれバまだ心いきほひなくてえとゞめず
女もいやしけれバすまふちからなしさるはひどくおもひそいやさけれバ
ありける

さこそいへて俗云にさうそそいつるとぞえまだおひやらずて親のし
りしさのやうをえてなるさわり人の子といへるそ親の家に年
さりてあるよしをあらせたる文くさ何かゝる婢をおひやるも親の
心のまゝにするわざそともかくもいひがたくえとゞめくそれさん
これまゝはひなくてとをそいへり 雑令に凡家長在而子孫弟姪等不
得輒以奴婢雑畜田宅及餘財物私自質舉及賣とあるをもて

女もいやしかれど家につかふる婢なるよしなりさるを拾穂臆
斷などに鄕黨莫如齒といふ孟子の語をひきいでゝ年のわかきをとこゝ
ときけるをいかしれどもひさしくむかしよりわかれるをいやしといへるさま
し臆斷にさる例なりとていふぞる古今集の文のたぐひ身をいやしくて年
たかきといへるも官位のひくきをいやしといへるなりそれより年ふかくならぞ
なるをやすまへはまけじとあくそこをみてもくハ家を出じといへるならう
けなきをいつけたるはひとへにわかびやしびたまいじきものやうを親のみて
さるあひびんかく人のせいすまでけやうくにとひのいやさちハ恋しけなふ
らひにさん

○心のいきほひなくてえとゞめず　塗本にとゞめかず

みそかにおや此女をおひうつ男ちのなみだをながせどもとゞむ
るよしなし　ゐて出ていぬ
つひにおひやらんとする親の心をはゞかりてさりげなくもそのまゝなりしを
おもひかけぬにそかにおひうつをそのしんまがひのするよしなく
ちの涙ハからぶみのことばにて血にあまるばかりなくなみだなり
とて親のしつるにひつけてその人の女をつれて出ていく
次の文にかへる人につけて出ていくもあるそてけるに思へるなり
女
くる人につけて
みてかくハなし人のくるにつれて男けかへれ女の家をはなれて
○塗本にかくいふによる　今のれ本になれハおちてをりまく古本にハあ

まで道のなに人をつかはじをおくせり

いづこまでおくりはしつと人とはゞあかぬわかれのなみだ川まで

いづくまでおくりしぞと人のとひなばなみだ川のほとりまで

おくりてかへりまゐらぬとあへよといへるなりあかぬ川のそ

こは河にてあらねどあかぬ別の涙を川のやうにながしてわがなげ

きはまりしをいひしらせたるなり人をおくるは川のほとり

までゆくがならひにもかゝる例あるなればなり古今集に山崎

にておくりしみえたる所までといへるを山崎川のほとりにて又李陵が蘇

武をわかるとてよめる詩に携レ手上二河梁一といへるなどを見てしるべし

此段塗本にあるにしたがふ今のまゝ本にはなきなり古本にてあ

まだつゞひて此の哥此次にのせたりてはわろし

男なく〱よめる

おもへる人のこゝろにて女のかほをかくるをまつて行しきたつゞくて

まく〱もみゆるく

つゞひてそなれうかれ此かさゝんありしに見さ係そへハうかしも

此かハたゞひよつゞひてハなれうかれうさかんわりきやれうるべしかく思ひ

かりてつよね中ハうれのうゝふれぞされに歎のおもひやらんとしても

まぐれてひやうびありし時に及りて又ハう彩しうどいつる多く此もハな

ずれのうつろをそゝろうさて拾穂抄断などそいでゝいなでとある本

にはさていへるバその解第二の句にかなへバ古き説もとりもちひてかく
いふ本によりなばそのこゝろをとれる也されど師ハ猶古き本に初
句をひいていへるも思へバいふかひなきよしよに釈したるがごときこ
えざるなりなるをや

○いでゝハ塗本二本にあるが今のすれ本にいでゝいなバとあるハ
らに思へバ古きハされの限なる生ていなぞ悟くなるべしとえらみて
じ然をえまづへて思ひたるあやまりたるそのわろべし　六帖續後撰に
ろもたるハやひてよりけるをハそをもにあやまりたるなく
とよみてうへつけるをぞれやあるてよめるなはさるにおもひてて
いひしうらをかくしもほしじと思ふにまちらにうへつゝまたきざバまで
ひて歌などかきてやる

またはさりハひとさはりもなき男の心がちたえつゝけるをぞ釈ある
てさわさて一とはりにおもひてこそハさあらひしるいとかりハあるらし
なげくにうすするふやうなるひがことはさらにうへつゝたるバまどひて
作りにぐわんなどかきて此人たすけ給へといのるなり

○あえかなれば　知本にあるにかく　なほさるにおもひて　塗本二本にあ
らず程おもひてかける本ハわろし　はたらにうへつゝたらバ塗本にあ
らず　ぐわんなどかれを塗本によりてなどえらじをくハへり
其の人相なるわろにくへつゝて又此日のいぬ乃時ぞありてになんから
うしていたましかる昔の人ハさるすなるをのおもひをなんかなる

今此篇日けるよしなんやそ
かくうしてハ俗語にやうしくらしてとも云ことわられ人ハそのことふう
くらひしきびんのはげししたそのなれどむかしハ人の情ふかうと
しかでけるすぢるそのおもひをなんしける今の世ハ人乃情あさけ
きバまれたるてものをうつくしひしむべき人をまさに為なんやそ
あをせじられ老のいつまんかく情のうれをあむるそぞものとれがうう
のるそたるおかりづきなうさる
○しなんやそ　塗本にしたぶ

四十段

むかし女はらからふたりありけりひとりはいやしき男のまづし
きひとりハあてなる男もたりけるをもちてわたりける
まづしきの下にきものちよといふもじをつけて見るべしまつとは云絶を
とくあるかたよひとつまいつるきの文はくあてなるハよおぼまするんとく
とそ田畑金銀のたくひをいつまでもとくはるハ家なるんとく
○あてなる男もとくはるをもちてうるそ　塗本にきぶとくある
とこ詞なれ本ハ仲せらるんかみにまづしきとハいひてそれに対するとバ
なくてハとしのうぬ文之
いやしき男もたるハしはすのつごもりにうへのきぬをあらひて手づ
からはりけりこころざしハいたしけれどさるいやしきわざもなら
ハざりければうへのきぬのかたをはりやりてけり
さる此下にうといふもじを入れて見るべしひとつの文はえきられ乃

つごもりにといへるハ元日ハさらずてハそれよりきるべき袍のきぬなれば
なるをつくろひてあらひてきよらにせんとなりうへのきぬハ和名抄に袍（和名宇倍乃岐沼）一名朝服著襴之袷衣也とありてづからといへるハみづから
そのつかふ人をもたせずしてみづからさましてとりくしたれど
もとよりいやしく生たらぬ女にてかゝるいやしきわざをしならハざりけれ
ざはまよりあやまちて袍のかたをやりてけりやるハやぶるとにおなじ
○古本にきぬのかたをとしけるハわろしを古点ハそれによりて今改
な本のかたとあるをへみぞやといはゆるハひがことなり萬葉集の哥
にきぬしゆくにひきたゆうたはされるみえきひいふかたちえん
とあるごくはりひてきはりかもとばかりのはかりくなくて
やぶれやぶれたまゝれをバうへのきぬぬきかへるとなすぞよき
せんかたもなくてたゞなきになきけり
まづしき人のあはれなるさまに身づからある袍をはりひきてぬひく
てんとするにやぶりてさらにひがごとなりたらんハ実にせんかたあれバなかなか
なしかるべし

これをかのあてなる男きゝていと心ぐるしかりければいときよらな
るろうさうのうへのきぬをみいでゝやるとて
心ぐるしハ楽毒にみゆるさまろうさうハ緑衫をなまりかよハしいへる
これハ六位の袍にたぐふべきにて生ていへるぞせんかたもなくてなき
なるよしをきけバすゞしもそやくやりてなげきをなぐさむるわざにて

あはれしれる人のなげく人をうける文也

○たぐひなかりけり　塗書二本にしるさず

むらさきのいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

此哥の意ハ拾穂抄に此哥を女にたとへて寵のいろこき時はそのゆかりまでもはなれぬよしなる野なる草木とハ此のゆかりと人をバいづれもむつまじきよし見もはるを目も遥なる心文にまさ大切に思ふ心にそのゆかりまでいとほしとなせバあさからぬこゝろをいへるかくちるに此袍をまゐらせんといへど此説にて見えたり古今に野なる草木とハみどりの袍をきる六位の人をたとへていへりといへるはわろしむさし野の心なるべし

これハ古今に此一首をうつして入たる文也古今集よみ人しらずの哥に紫のひともとゆゑにむさし野の草ハみながらあはれとぞ見るといへるふるきたとへいへるをたしかにあらはしてむさし野の哥なるぞと記者の釈しるさん

四十一段

むかし男いろこのみとしるしる女をあひいへりけりされどにくゝハあらざりけり

しるしるとハ色好みとしらばはじめからいひよらでもあるべきことなるをさもあるそこゝろあぶれる女とあひてなじみになれるさまなり後撰集の哥に文中のあるじまづとも思ひをバあひぬものと思はれうえざらんされどもしかすがになれるハ心あぶくしてあひしけれど

又よくかゝぬ所もありと云意を見せたる八条の意にて文よりふかりそ
つゞひきすぢしるし
志だしいきけるとなほいとゞしろめたくさるとていかでさへ
はるまじらきなる中なりけれど
よくかゝぬゆゑにまだしいくへまさるにかよひなれかよはらんやあ
らんとらむかづらするはる聲く志だしいきけれどやりきくろかへる
れそいとあれゝかづくえゆる女までかへるなほをやりさてうし
ろめられハらをあれさくさりとそえくとハ志だしいげどもかれく
えゆる女なきハ中ねえていくまだれるにまれども母くかゝぬ所のみよつ
きそおぼゆきバはありそれでき文あるまじかりける中なりけれで

絶れかよひくるかと云意を見たれバの下に絶ぐゝひくるにてと云詞をい
れてえるべしいひのこしたる文くきてそかへふとけるがちくちて
もとの云意くたゞ意にハまけすと云意として侍さふことよ
るきとそえせられぬ中くと云意に解きてるハひがごとなく
○さりとてやと云よりしもあれ塗本にはなしぶ ちがひも大かた同じ
今此ふれ本ハ衍文ありて伝くに写えぬるにくはしきを契沖法師の
書名本をも見ながらそれによらでさきこえぬ文をくはへて
さくいつもそつかれるひがごとぞや
かりさにはばかりさかるにかりてえいかでかくなん
かくもあれさるに志だしいくまさかるにあらて二つ三にぞかり

えあはぬはいとしくかなしかれど使さしてふみをおくりていらふは
ふぞとおもへるなるらん
生てよしほどすぐればいまだかへりごとをせずかよひぢと今はなりなん
それの家よりおこりてもし家兄ほどすぐるにまづ消息あらん
を兄ぎみはかたりて父男をかよはしむべかれどふかよひぢと
いひそめたらんとぞきく
をのうきがはしさふよめるなりなるを
記者の詞にて生てよしとかいふをよみてたてまつるは女の心のうち
ぶはえぬもばかりうへ身のほどまでいひなならんとそのことがらしきま
よみておもわ子よしを釈したまへ古言によくにうしろかうしらへ

ひ又おもへるがしさふとはひてはおもしき云の何ともなくてわろきやう
はいきわするは中くに見わしかく同じき此詞をうきさみていふがおの
物語のふりなり

（四十二段）むかしかやのみことまうすみこおはしましけりそのみこ女をおぼ
しめしていとかしこくめぐみつかうたまひけり

賀陽親王ハ桓武天皇第七の皇子なり女をおぼしめしてとハ
もおぼしめさぬなりふて女によみそとぶめたまふをいつかしこく
そらくとき言んつかうハつかひを者使にいひたるん女にこんとゞめる
見てよくえぐとはなひさまつゆゑによれ女のあまくまうきさむら
ふさきを思ひてかきる文なり

○たゞひとり　塗本にあらず

いとなまめきてあてなるをわろき人をゆるさゞりけるを
これはよき女の住まうさむらふ中にすぐれてなまめきてあてなる一人
は女をわろきをのこをゆるさゞりしてとかくいひよりかゝるひとりとも
きくにていとなまめきてはひとりにすぐれて艶なるよしなり
さるを臆断に卅八段のごとくなまめかしくおもはじといへるはおろかなり
て文字に拘なまめきてあるを男ありとおもへるも誤なり

○いふ　塗本二本にあらず　わるき人をゆるさゞりけり　塗本にも
まてくさなり

それのみとおもひけるを又人きゝつけてみやびをて
いとなまめきたる女にかよひけるを男は家ひとりと思ひたるにやう
まれは思ひなる男のもとにその男が家のみとおもひける男のよろこびを
きゝつけてうらみの歌やるなりこれは二人の女に二人は男ありとなり
古言の説はわろし

ほとゝぎすのかたをかきて

みやびをて子規のかた絵つくりてあはれなるにたえて女をほめしき
ほとゝぎすにたとへてうらみよむ事中にかきてあるゆゑ古今集に小町が姉の
やけるにちる紫にみをきゝて人のそれにおもひけるものゝ歌の中に
はるとてうれゆく小野の路のあさぢふを今は思ひでたえずなるにもあり
あきばかりをおもひくらして首の風情のわざく

○うたをはらして塗本にしたがへ

ほとゝぎすなが鳴里のあまたあればなほうとまれぬおもふものから

此歌ハほとゝぎすと汝をいひて里ハあまたあれバなつかしうおもへどもの
うとましうおもふをぬと云をく四五の句を次第してみるべく其後
なほうとまれぬハやりうつさまで覚えをく
といへりけれバ女けしきをとりて

男のけしきを女のとらへて俗語に機嫌をとるといふにおなじ源氏物語
にほゞみえたる詞もおほく人そのかたにハそれけれ
をとりて中をく松風寒くにそれ夜ハ肉うともやさせたまへくれど
さけざりし清書しれさうれ抜うけぬまで寒で結ひめと見えたる清
くしたゝうをもちいておなじ古さまに女のけしきの物するよしにとゞう
ありけるハわろし

名のみたつしでの田長ハ今朝ぞなくいほりあまたとうとまれぬれバ

しでの田長とハ子規の一名とたれもいひつたへたるほとゝぎすハし
での山より来りて農をすゝむる故にしでの田長といへりし歌詠の
いへれそれ是等ハよくかなへる名のみたつとハ子規ハあまたの
里をなくと云ハ名のみたちてうとまるゝハきみにぴたあまたの
人にうとまれぬれバそれがかなし此に今ぞなくといひつゞけしなのさハ
又さく人なきのみやうにみるまでさよう我身のみくなくべきようと
まかしかなしさにこそなけといへるあはれの人にうとまれぬれど

いひてきみならぬわれしりきさまなくちるゝそばかりのおもてみえいでゝ
しておもひやるわりなくてきゝはつかなくて八田をさとなづけ
て田をほるさる人のいほりおほき故詞の縁にいへるなり
此鳥ばかりぞあまたに此人にうとまれぞなりける

○ほとゝぎす　塗本二本に忠さず
時をさだめずなんあり、ある男よし
此君の詞くわのずさつきとて五月はなくとぎすのなみされく時なれば
ふるまほとゝぎすをよみあへるよしをあらはせるなり
いはでおもひたしてけ田をさはなほるのむかずすむ里に住しなれども
きゝかしこけるわからなとぎすいうよしけなでわがすむ里に声さえ

ずそ、やりけれなみにすべしさきとくちかしこまりわかれの田をさ、
ひとつけるがうちる此詞によりていほりおほきといへる詞のおもてり
うつろひまうさせらへべしや、うぐひすはわかくなくすくなくて田をさ
はみてみをはもしならべをあのやうなうゆかてもうけなるといへる
をうちてそのまゝにそとんへりずおもしろけれく八のトにうと御しれ
どもそら詞をつゞけてみるべしいひのちしなりてみそとそく

四十三段

昔男ありけるあづまへゆく人によみてやりけるをとて
びうりくれ

あづまへゆくとは任国にゆくなり土佐日記にある人あがたのほどを
五とせをへてくだるも土佐の国に遠き、てありしほどをいへるみ

はなむけとハもとかの路に馬をとゞめてやるわざなるをなぞそあらへむ
まで旅にたちゆく人をおくりてかくまうけの詞あるべしはてむ
までハ餞するわざをいへり古言に旅ゆく人のあるハかれをはなむくむ
くるゝまとられたるハわろかり

○男なりをさ（知本によりてくはふ）よびたりけるに　されど
うとき人にしあらざりければ家とうじさかづきさゝせて
うとしき人ならバまらうどで離遠にもして盃さしたるべくハいへどうじハ
家戸主（イヘトジ）を音便にとうじといへるにて俗に女亭主といふに同じ
女のさうぞくかづけんとすあるじの男うたよみて裳のこしにゆひつ
けさす

かづけんとハかづけんとするまゝにておくるよしくさしハ裳にゆひ
つけさせたる体なりけるハあるじの男がまうけしてあるならねバなく
しをあらせたるべく
出てゆく君がためにとぬぎつれバ我さへもなくなりぬべきかな
裳なくなる喪なくをいふ○たゞなく喪とハわざはひなどすべてよから
ぬことをいふ君がための裳衣をぬぎてハ裳のなくなるといふが詞の表
にて君が旅路のまもりをぬぎつれバ家もあられくもなくなるべき
べしさてしうまりたるとふ言くれハさてしくをいふ詞によれる
又あられくもなくと同じやうにいへる例も万葉集の歌にあまた
みえたるうちみらハかりけくやくをはらんをまくもなくもな

くもたらんをいふ

○此段ハあるが中におもしろけれバ心とゞめてよまんにハいとゞあぢはひてしれあぢはひなかるべし（知本にかくはり今の本ハ脱文ありて／ひろえび吉本ハ大きくまさりしかれど知本より）まさりたり此文塗本にハなしそれによりてそふきつのちれ人のおほがおもへるこゝろをそこらにかきいれおきたるがまぎれて本文にハなりしあり此物語にすべて段を評したる記者の詞を大かたハそれ段のころによしといへる今みれバよくもたらざりけるを段のさくてなげきよなどいへるハ文かろらぬよしふつてをみれ人のまさだめてハよしやなしやあまりやさしやなどいつくしてかきさるよのとぞおもはるゝ此段も此老のよきつらんをみづからたがへるおりし

ろかれどいふべきハ古へにたゞふみてかゝるべしといちはやくもわろし

四十四段

むかし男ありけり人のむすめのかしづくいかで此男にものいはんと思ひけりうち出んことかたくやありけん

かしづく人のむすめとハえらふるをたうとされにいひて詞のあやをなしたるなりしづくそいつきしづくともつゞけいひて大切にするをいへり竹取物語に几帳のうちよりもいださずいつきかしづきやしなふとこゝにみえたりいでゝえハ俗にいまていでゞぞして此男にありんといふつどむすめにまづしくていひいでがたくやありけんといへるをうけてあかれぬうちにおもひのひすがまてまづらへるなん

そのやうになりてしぬべき時にかくこそ思ひしかといひけるを

おやきゝつけてなく／＼はゞかりけれど

もれやうになりてとゝハ何やうひともなくわづらふをいつもてかくこそおもひしかといふハ下さの此人にむかひていふ詞（なりされバし）つま女などにかゝりしあらんそれを秋のきにつけてたとへつることいつる心をほくしきゝてとゆゑとハ笑くなくしつゞるそむすあはさる心はうつろひもありてかく今はの時になるくやしきもそひていとゞかなしくおもひてはべるへ

まどひ来りけれどしにけるをぞほれしくとおもひきるなり

まどひくるとハ娘のいのちたえぬうちにあはんとていそぎて見るをいふ

よひごとにきく人はさしくハなにとざなくてさびしきところへちりゆくゆゑ
いふにちかく

○をりゐて　古本にをらず

時ハみな月のつごもりいとあつきころほひによひハあそびをりて夜ふけてやゝすゞしき風吹けり螢たかくとびあがる此男見ふせりて

あそぶとハ管絃歌舞のたぐひをいへるなりへよひハええとそよひのおとハむつたのまへまで笛ふき琴ひきなどしてあそびをるをいつむしハ人の志にけるをりハわびしうするなりそてはべるさるにて棺の前までおもしろたるすさびハ死ぬる人のめでくまう

此世にうつろやくるまでかりしみのあそびになればなるべし古事記に天若日子の死たまふ時に日八日夜八夜以遊也（ヒヤカヨヤヨヲアソビタリキ）とあるをはじめ日本書紀には允恭天皇紀巻天武天皇の巻などに天皇崩坐し処に歌舞奏楽の事見えたり又継体天皇の巻に是歳毛野臣被召到于對馬逢疾而死送葬尋河而入近江其妻歌日比攞哿駄喩輔曳輔枳能明樓阿符美能野愷那能倭倶（ヒラカタユフエフキノボルアフミノヤケナノワク）吾伊輔曳府枳能明樓（ゴイフエフキノボル）とよみえたればこの時はなべてあそびせしるものなるを（史記の周勃世家に常為人吹簫給喪事とあればから国のむかしも人のもなるをりあそびせしなり）ただし中むかしのはたみ国のいにしへのわざはやうくにすたれたるもあれどかく此物語にかゝるをみればその時までもある事なりしなるを臆断にはよろげのしわざをうちやめたるをあそぶといひたるにはいへるなりてあるをも遊ぶとぞ云へといひならへるこれらの歌にかなはぬ説なりけるんならんにはよひとかぎりてはいふまじそれちかくて夜ふけてこそあれわざをやめていふことなるやうに見ゆるを

とぶ蛍雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりに告げこせ

つげこせとは臆断には告よとねがふことばにせの字をそへてとよめるもねがふ詞なりせとそと五音通ずればこせもこそと同じ詞へといへるいぶかし又秋風にさそはれたるならずとも秋風にさそはれならずそぎこゆなるともよみて秋風にさそはれてくるものなるをわけてすゞしさおそや秋風のふきたちたるちゝちすればなるにつげこせとはいへるならん

らし魂ハ冥漠に帰するものなれど蛍の高くとびあがるにつけて魂にひとしきゆゑにかくつげよといへるを雁ハ春ゆきても秋ハ又来るものなれなれバよそへて雁につげこせとよめるにや此男見ふせりてといふにハ此意をふくめるやうにおぼゆるやといへり是も臆断の説くはしからんまでいぬべくはといへるをもとめてたまによそへてなしたるにかゝはるをいふことあやまりなるべし

○とぶ蛍　古本にあり

くれがたき夏の日ぐらしながむれバそのこととなく物ぞかなしき

暮がたきとハ日もきはめてながきをいふ　ながむるハそのおもひをりさへなり　一首の意ハおもひし女のあはれなりければそのをりの事をおもひ生てありしむかしハなけれど家ゆゑに死したるものゝなほしけをもき日ぐらし思ひつゞけてそのかなしさいへるなり　拾穂　臆断などに世間此無常をよめりとせるハその事となくといふ詞をかへりみぬあやまりなるべし　さて此歌ハとぶ蛍の歌とおなじをりのよみにハあらじその時ちがへるにて夕ぐれなどによめるなるべし　かみにつごもりとあれば下旬のことまで晦日にハあらざれバ此歌もそれ月のうちなる

四十五段

むかし男いとうるはしき友ありけりかたときさらずあひおもひけるを人の国へいきけるをいとあはれとおもひてわかれにけり月日経ておこせたる文に

うるはしき友ハ吾友といひけるものをハいへども　ひとのふへとハ

都をおくく他国へいきたらんいとあはれとハ俗語にあゝのこゝろかはい
さうなといふ事也
あさましうえたいめんせで月日へにけること忘れやし給ひ
けんといたくおもひわびてなん侍る世の中の人の心ハめかるれバ
わすれぬべきものにこそ侍めれ
これハ友だちのおこせたる文のおもむきあさましうハ俗語にけしか
らずと云事也久月日へにけるハさぞわすれ給ひつらんとおもひわびてこそ
思ふはせんかたなきをいふ侍るハちかうてハ居ますと云事也めかるゝハ目
離れてあひえぬる事也
といへりけれバよみてやる

めかるともおもほえなくにわすらるゝ時しなければおもかげにたつ
此歌の意ハめかるともおもほえぬにいかでかくハのたまふぞさぞめか
るともおぼえぬ人をわすらるゝ時しなければ俗語に
面影にたつゆゑんとハつゞく其二句ハひのうしてふくめたる意なり
にいへるがごとしおもほえなくにハおぼえぬまゝと云おぼえぬと云
意にハあらず古意の説ふかう

四十六段
むかし男ねんごろにいかでと思ふ女ありけりされど此男をあだなりと
きゝてつれなさのみまさりつゝいへる
いかでと思ふハどふぞしてあハゞやと思ふなり
大ぬさのひく手あまたになりぬれバおもへどえこそたのまざりけれ

大ぬさハ臆断に契沖の説とてはらへする時陰陽師のもちたる串に
にしたるしでなりはらへはてゝぬさバながすをおのおのひきよせてな
でつるものへといへるがごとし依て一首の意ハ大ぬさのひく手あまた
なるが如くあまたの女にかよふ君ときこゆれバねんごろにのたまふ
をバ恋しくおもへどえたのみなし頼らびそれゆゑにつれなくいら
へやれんといへる歌なり
○きこゆれど　塗本にしたがふ　なりぬれバとある本ハわろし

かへし　男

おほぬさと名にこそたてれながれてもつひによるせハありてふものを

歌のわりてハ大ぬさハひく手あまたと名にこそたてれ川にながるゝも
てつひによるせのありといふものをひく手あまたなりとてそかへつべ
きやうすなるびとこゝろをふくめてハいひおこしまた文なとおくる志
歌の意ハあまたの女にかよふと名にこそたてれ終へゆく末にハひ
によるのハあるものをといひまふハ心のえびくつなりそのゝる
るにハ君へといふまでおもひせらるなれながれてもよつるハつる
のてもとハ実までもはろくにてかへるなくなれてたえまくしめ
此意ハ初秋までに候ねむそもあるべしきまつになるひて桐壺
の巻に鈴虫の声のかぎりをつくしてもながき夜あかずふる涙かなへ
あはれをつくしてといふこゝろ

四十七段

むかし男ありけりうまのはなむけせんとて人を待ちけるにこざりければ

ゆまこむ

今ぞしらるしこれぞのと人まろん里をバわきんびとうべうとまう

世ぬ人まろくるしけまん人のうへをもおひやりてうぐ此ぞ一二の句くる

しれぞのと今ぞしらるべきをさて八五七のちゝぞにられつぬゆゑよ

あるきれまいつゝん一そのとハ古ぬ人まちてくるしれそのとハあぞ

しれげくるしけまちゑバ人まろん里をバさえびとうべきる也

とつゝ行うまびハ不ㇾ離也

[illegible]文庫